

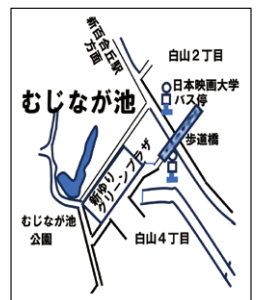


73

麻生区
文化協
会報

麻生区の風物紹介

「むじなが池」



新百合ヶ丘駅からバスに乗り、「日本映画大学バス停」で降りるとグリーンプラザ商店街があります。「むじなが池」はその奥の公園内にあります。

むじなが池は、江戸時代の地図にも記されており、グリーンタウンの造成が始まる50年くらい前までは、灌漑用の池として3メートルくらいの深さがありました。湧水による美しい水は、下流で小川となり、小魚やシジミ、蜆などが生息していました。渇水期には下流の田んぼを潤すため、年に一度、栓を抜いて水を出していました。

造成当初は、金魚や鯉を放流して、子ども中心の釣り大会が開かれていましたが、下流域で田んぼが宅地や道路に転用されたため、灌漑用としての機能は不要になってしまいました。

現在は、グリーンタウン内の公園のひとつとして整備・管理されています。池の形は少し小さくなっていますが、周囲の林は昔とほとんど変化ありません。昔あった湧水は、なくなってしまうよう水質が良くありませんが、魚を釣りに通う人たちの憩いの場になっています。

奥の沼だった区域には、滝や橋、あずま屋などが設置され、安全に遊べるようになっていきます。しかし、この地域は、昔から毒ヘビ(マムシ)が多く生息しており、数年前に小学生が噛まれたことがあるので、草むらには要注意です。

むじなが池の名前の由来、「むじな」とは？

アナグマの別名で、狸やアナグマを指した呼び名です。昔は、見かけたことはありませんでしたが、最近では生息域が狭まったこともあり、昼間でも見かけるようになりました。

(文／井上俊夫、写真／小田島寛)

からむし第73号の
ラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介

「新ゆりグリーンタウン」の北側で、新ゆりグリーンプラザ商店街の裏手にひっそりとある「むじなが池公園」について、井上俊夫さんの文章と小田島寛さんの写真で紹介いたします。

P2 山本奈保美新区長に聞く

麻生区長に就任された山本奈保美さんに、長寿日本一の麻生区における文化行政の在り方、世代間交流の進め方などについて、編集委員が伺いました。

P3 柿生の思い出

顧問の佐藤英行さんに、長く地域の文化活動に関わってこられた立場から、柿生小学校創立150年に対する思い入れや柿生地区への思いなどを寄稿いただきました。

P4 会員の活躍・活動紹介

寺子屋わかたけの主宰者として、麻生区の小学生に田植えを指導された井上俊夫さんと、修廣寺の写真が、麻生区観光写真コンクールで最優秀賞を獲得された菅原陽子さんに寄稿いただきました。

P5 私と陶芸は悩むことばかり

長らく早野聖地公園ボランティアに関わり、美術工芸部においては陶芸を中心に活動してこられた、麻生区文化振興賞を受賞された内野勝雄さんに寄稿いただきました。

P6 麻生区文化協会の行事報告

文化協会が今年度前期に行った行事から、定期総会、デッサン会、俳句講座、および夏休み親子教室について報告します。

P8 会員の活躍・文化協会のこれから

あさお洋舞ぐるーぷをリードしてこられた伊藤胡桃さんの受賞についての報告、および、麻生区文化協会が今年度後期に行う麻生区文化祭、あさお古風七草粥の会、文化講演会などを紹介します。

編集後記

インタビュー

山本奈保美新区長に聞く

2023年4月、新たに区長として麻生区に赴任された山本奈保美さんに編集委員がお話を伺いました。

◆麻生区に赴任されて感じられた印象は

私は生まれも育ちも川崎で、今は中原に住んでいます。私は仕事で何度か麻生区を訪れましたが、なんとなく「よそゆきの街」って感じてましたね。実際に赴任してみると、麻生区はバラエティに富んでいて、新百合ヶ丘駅周辺のおしゃれな街と、対照的な緑。例えば万福寺のおやしろ公園、地域の人たちがみんなでケアしています。通勤にも便利でありつつ、憩いもあって、生活するにはバランスが取れた街ですね。



◆川崎市におけるお仕事の内容やご経験について

私のこれまでの仕事は、子ども子育て支援、会計管理などで、「文化・芸術」には直接関わってきませんでした。麻生区に来て、身近に文化・芸術に関わるのは初めての経験なので、新鮮に感じています。

◆麻生区は「日本一の長寿の街」になりましたが、これからどのように取り組まれますか

平均寿命が男女とも全国一というところがメディアで取り上げられて、区にとって良い材料として使わせていただいています。しかし、ただ長生きではなく、気力・体力ともに充実した「健康寿命」を伸ばすことが重要だと思っています。このためには、高齢者だけに焦点を当てたのではなく、若いうちから積極的に気力・体力を充実させ、全世代で健康に過ごせるような施策が大切だと思っています。

ちよつと気掛かりなのは、麻生区

では最近、特殊詐欺や交通事故が増加しているので、安心・安全な街づくりのためのキャンペーンなどを進める必要があると思っています。

◆川崎市は100周年ですが、麻生区としての取り組みは

私は、市全体で100周年を祝っておしまいというのではなく、次の100年に向けてどう継続し発展させるのかという視点が大切だと思っています。今年、プレ100周年ということでウォークラリーなどが予定されています。また、100周年では芸術・文化・緑を活かした事業を企画しています。このほか、来年は、「全国都市緑化かわさきフェア」も予定されており、麻生区はコア会場ではありませんが、いろいろなイベントが企画されていますのでご期待ください。

◆横浜市営地下鉄の延伸に伴う新百合ヶ丘周辺のまちづくり構想についてのお考えは

今後、働き方も多様化し、人口減少していくことを考えると、持続可能なまちづくりという視点がより重要になると思います。皆様が考える住みやすいまちのイメージは多様だと思いますので、区民や事業者の皆さんと地下鉄ルート周辺のま

ちづくりについて意見交換していければと考えています。

◆人口の推移もいろいろあるようですが、「ふるさと」と言えるような麻生にするには

今、子どもたちの間に格差が広がっているように思います。経済的な格差は、子どもの「体験」の格差につながっています。子どもに地域の中でいろいろな体験をさせてあげたい。そういう意味では、麻生区文化協会の夏休み親子教室の取り組みは、優れていると思います。こういった体験を、いくつかの団体との連携でさせてあげれば、「ふるさと」を感じてくれるのではないのでしょうか。

◆文化活動に若い人が参加してくれるようになる妙案は

若い人たちはリアルだけでなくSNSなどインターネットでゆるくつながっていて、「開かれたつながり」を好みますから、インターネットを活用すれば若い人も入ってこれるはずです。今は移行期にあるのではないのでしょうか。

◆文化芸術活動に対するお考えをお聞かせください

私は最近、アニメを楽しんでいます。アニメはわが国が世界に誇れる

文化的コンテンツです。アメリカでも日本アニメのコスプレなどが盛んと聞きます。こういうサブカルチャーも含めた「文化」も大切ではないかと思っています。

◆おわりに、麻生区文化協会への期待など

先日、麻生区文化協会の総会に参加させていただきましたが、菅原会長がとても広い視点に立ち、「あたらしい風」を入れると話されました。ぜひ、幅広い年齢の方に加わってもらい、あたらしい風を吹かせてください。

あとがき

新任の区長ということで、期待を持ってインタビューに臨みました。お話を伺うとお人柄が偲ばれ、決して大風呂敷を広げることなく、地に足がついた施策を提案されました。

文化活動についてはインターネットを利用した「開かれたつながり」と話されたのが印象的でした。



区長室でのインタビューの様子

(佐藤勝昭・橋本周・関森田鶴子)

柿生の思い出

柿生小学校開校150周年に向けて

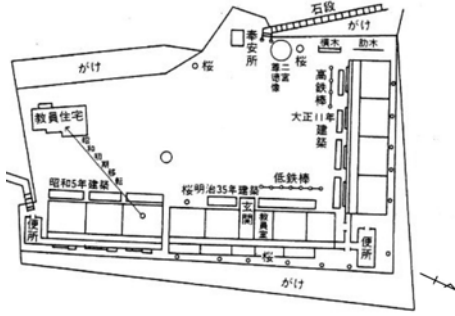
佐藤 英行

◆学校の誕生

明治5年学制が頒付され、「学問は、身を立てる財本」であり「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人ならしめんことを期す」という基本理念から全国に学校が設けられました。

構想は立派でしたが、学校を建てる経費・維持はすべて地元負担でした。学校は寺院や民家を借り開校するだけで精一杯でしたから、寺子屋が名前を変えたものでした。

柿生小学校は、明治6年に片平学舎、上麻生学舎、下麻生学舎、岡登学舎、研精学舎が開かれたことに始ま



義胤尋常高等小学校 平面図 昭和5年以後

りました。このうち上麻生学舎にルーツを持つ尋常上麻生小学校と、白井義胤氏の寄贈で明治35年に開校した義胤尋常小学校が大正2年に合併してできた尋常義胤高等小学校が直接のルーツとなっています。

◆昭和25年頃の柿生

小高い丘の上に建つ柿生小学校は、現在の柿生中学校のグラウンド部分に建っていました。現片平に建つ新校舎に昭和34年に移転するまで、長く教育の場であったのです。

私も6年間通った小学校です。朝石の階段125段を登るのが低学年の時は大変きつかったな。登り切ると左に二宮尊徳像跡があり(戦争で物品供出のため昭和17年には撤去され、私が小学生になった時にはなかった)、右側に奉安所があった。内部は見たことがないが、天皇陛下のご真影が飾ってあったそうです。現在は、「白井錠次郎先生頌徳碑」が設置されています。校舎はオンボロで、強風で倒れない

ようにつかい棒13本から20本で支えていました。校庭の中央になぜかガチャコン式のポンプ井戸があり、井戸の上が藤棚になっていました。

校庭のはずれに校長の岡本恒二先生の住宅がありニワトリを飼っていて、遊びに行くと、この卵には黄身が二つ入っているよと割って見せてくれ、それを飲んでしまい、びっくりでした。

通学は下駄履きの人も多かった。廊下が広く、競走ができるほど、いつも先生に叱られ廊下に立たされてきました。掃除の雑巾掛けは3人ならんでできました。

◆戦後の食糧難の時代

当時、暖をとるのはたるまストーブでした。まわりにお弁当を並べ、お昼まで温めるのですが、勉強中にたくわんの香りがしてきてお腹が

空いたとなるわけです。先生に隠れて早弁する人もいました。

4年生になると給食が始まりました。コッペパンに脱脂粉乳のミルクとおかずがクジラの竜田揚げ風の煮物がよく出たな。決して美味とは言えないけれどお腹が空いてがつがつ食べました。今日の給食とは比べものになりませんね。

◆地域ぐるみの大運動会

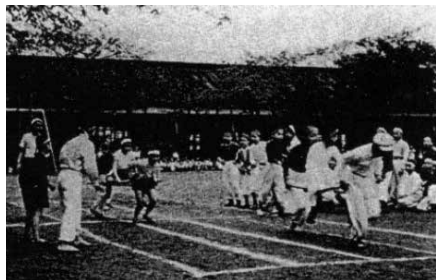
年間行事の運動会は楽しかったことの一つです。朝一番に合図の花火が上がると、親たちも朝早くからお弁当を作り、校庭に陣取り応援するのです。当時はテレビもなく、運動会とか盆踊りは地域の楽しみの一つでした。盛り上がったのが騎馬戦とか、当時黒川・片平・岡上分校が一緒の運動会なので、対抗リレーなどは大変な応援合戦になりました。鈴

割りが終わるとお昼で、家族が囲んで母親が作ったのり巻きやおいなりさん、煮物などが並び、楽しいひとときでした。

校内ではケン玉が流行っていました。自宅で練習してきた技を披露し合ったものです。飛行機のような難しい技を得意とする人がいたね。外ではドロケン。S字を書いて二組に分かれてケンケンで相手の陣地から宝物を自陣に取ってくる遊びで、お昼休みは夢中でした。女子はゴム跳び、縄跳び、石蹴りなどで遊んでいました。

※本文は私の記憶で書いたもので、事実とは異なるところがあると思います。ご了承ください。

《参考図書》『柿生の教育のあゆみ』 『ふるさと柿生に生きて』 『ふるさとは語る』



上/山の上の小学校(昭和29年) 右端は中学校のグラウンド
下/山の上の最後の運動会



白井 義胤
柿生の教育に生きる
私財を投じ学校建設

天保14年、下麻生の農家生まれ。東京の麻布に豪邸を構え、育英資金や海防資金などあちこちに多額の寄付をしていました。明治35年に高等義胤小学校を開校させ、以来、大正・昭和の戦前から戦後と半世紀にわたり数千人の卒業生を出し、地域の教育に大変貢献した人です。

会員の活躍・活動紹介

体験活動を通して

子どもたちに豊かな学びを

稲作指導 井上 俊夫



導をしています。始めた頃は、旧白山小学校のみでしたが、真福寺小学校が加わり、自宅そばの10アール程の田んぼを半分ずつ使って稲作体験を行います。麻生と王禪寺中央小学校は、学校内に田んぼがあり、依頼を受けて7〜8年になります。

稲作体験の主な作業は、田植え・稲刈り・脱穀&糶りですが、稲の成長観察や水の管理、スズメ除けの案山子作りや稲わらを使った正月飾り作りなど、年によって多様な指導を行っています。

麻生区内の小学生に稲作を通して、土に触れ、その工程を体験してもらうことを目的に活動を始めて35年が過ぎました。今年は5年生の体験と真福寺小の寺子屋体験活動（1年生から6年生が対象）に取り組んでいます。

◆小学校5年生の体験活動

区内の小学校3校（麻生・王禪寺中央・真福寺）の5年生に稲作の指

◆寺子屋の体験活動

毎年行っている5年生の稲作体験に加えて、今年は新たに寺子屋の体験活動で稲作を取り上げました。1年生から6年生までを対象に、毎回募集を行い、全5回の計画で「田植え・稲刈り・脱穀・餅つき・わら細工」を行う予定です。

第1回（6月）の田植え体験では、22名の子どもたちに加え、保護者も参加して、もち米の苗を植えました。今年は田植え以降、天候不順な日が多く、収量減が予測されますが、子どもたちと餅つきができることを楽しみに進めていきたいと思っています。

*寺子屋とは？

2013年から始まった川崎市の事業です。目標は、地域ぐるみで子どもたちの学習や体験をサポートする仕組み。そして、多世代で学ぶ生涯学習の拠点づくり。子どもたちに豊かな学びや体験の機会を提供することを目的にしています。



麻生区観光写真コンクールで最優秀賞受賞

菅原 陽子



◆夏菟太鼓で和太鼓を指導
夏菟太鼓のスタートは昭和53年です。子どもたちに太鼓の楽しさを伝えたくて始めました。全く知らない地域に越して子育てをする人の心細さを、私自身が実感したことがきっかけです。

昭和58年に修廣寺のオリジナル仏像として建立した、私の大好きなお地藏様の写真が、麻生観光協会主催の「令和4年度・第10回麻生区観光写真コンクール」で最優秀賞をいただきました。

これまで四季を通じて100枚近く写してきた中の1枚が選ばれました。仏像様も受賞を喜んでくれていたことでしょうか。「写真や書、絵や音楽演奏も、その人の内なる想いがシャッターや筆、楽器を通して表現され、人に感動を届ける」いつもそう感じていた私なので、大変感謝しています。写真を掲示してくださった区役所の皆様をはじめ、見てくださった皆様にお礼申し上げます。

子育てとお寺の仕事のなかで時間を生み出すことに苦労しましたが、太鼓に興味のある人を集めることが先決ですので10年位要しました。それぞれの生活をされている人々を「太鼓」という目的に束ねることは大変でしたが、ある意味楽しいことでした。



右上／麻生区観光写真コンクール最優秀賞受賞作品「おじぞうさまボクのおはなし聞いて」
上／親子教室和太鼓指導の様子

私と陶芸は悩むことばかり

内野 勝雄

◆文化振興賞を受けて

麻生区文化協会令和5年度総会において、麻生区文化振興賞をいただきました。とても光栄で、菅原会長はじめ、麻生区文化協会の役員の皆様へ感謝します。

からむし編集委員会から、受賞の対象になった陶芸を通じた美術工芸展への貢献、あさお古風七草粥の会への餅焼き用木炭の提供について寄稿するよう依頼を受けましたので、拙文をしたためました。

◆陶芸との出会い

職場が高津区にあり、区民懇話



早野里山ボランティアでナラ枯れ対策をする筆者

会で「野焼」のイベントを開催する

との情報からお手伝いをする事になり、高校の先生を中心とした近所の陶芸教室の経験ある市民の皆さんのお力添えをいただいたおかげで百人位の参加希望者を得て実施されました。

この時の経験と人間関係の継続から陶芸教室に入学、次回から地元陶芸仲間と手を取り合いながら2年に1回の開催に参加し、「野焼」の醍醐味を忘れることができず、自宅に陶芸窯をもらってきて自宅でも時間を見つけ、ろくろで作品を作っていました。

◆麻生区文化協会との出会い

昔の文化協会の杉本会長から「陶芸やってんだって。よかつたら文化協会に入りませんか」と声を掛けられ、仲間に入れてもらいました。

◆文化協会の行事への協力

古風七草粥の会実施に当たって、木炭の協力依頼があり、里山ボランティアに出かけ参加、即入会しました。

以降毎年、文化協会と里山ボランティアとの橋渡しを担当し、里山で焼いた炭をお届けし、古風七草粥のお餅を焼く炭の協力をしています。

炭焼煉瓦と土で作った窯で約3日掛かりで火を焚き、窯の空気穴を塞ぎ煙がなくなるまで様子を見、翌週の土曜日に窯から出来上



炭焼きの窯

がった炭を出します。

現在、川崎では炭を焼いている所は早野だけです。

◆陶芸窯について

一、電気釜 安定した焼成が可能、特に絵付けなどは完璧です。

二、ガス釜 プロパンガスは、使っているうちにボンベが凍り、ガスの圧力が落ちる。

三、野焼 薪を使うので温度が低い。時間を見ながら薪を補充するが、相当量の薪の確保が必要。



陶器の野焼

◆最後に

毎回苦勞の連続、特に毎回同じ作品はなく、窯の扉が開くまでどんな作品に出来上がるかすべて任せ、喜ぶときもあれば、がっかりのときは最後の掃除もしたくない、これが本音です。



王禅寺団地会館での展示



文化祭美術工芸展にて



制作した土器

麻生区文化協会の行事報告

2023年度

総会報告

2023年度総会が4月29日、区役所4階の第1会議室で開催されました。

総会に先立って、昭和音大の4名の学生さんによる弦楽四重奏曲の演奏がありました。

会長の挨拶に引き続き、表彰式



弦楽四重奏曲の演奏



表彰式の様子(左/文化祭奨励賞、右/麻生区文化振興賞)

があり、文化祭奨励賞が、山本麻生区長より、板橋洋一様・富田宏子様・小田島寛様に授与されました。また、麻生区文化振興賞が、菅原会長より、内野勝雄様、及び白鳥神社お囃子保存会様に授与されました。

次いで、議事に移り、丸山博子議長のもと進行しました。

はじめに、2022年度事業報告が総務からあり、次いで2022年度決算報告・特別会計報告が会計からあり、監事より監査報告が行

われ、拍手で承認されました。次に審議事項に移り、2023年度事業計画案が総務から、2023年度予算案が会計から提案され、審議の結果、いずれも承認されました。

議事終了後、各部に分かれて部の役員、活動方針を話し合いました。

(佐藤 勝昭)

舞台衣裳の

女優さんを描く

デッサン会

7月15日、麻生市民館大会議室にて、劇団民藝の女優さんを描くデッサン会を開催しました。

今年は、32名が参加し、舞台衣裳を着用した、藤巻るもさん、賀來梨夏子さんのお二人をモデルに熱心に描いていました。

また、麻生区美術家協会の3名の作家が見守り、希望する参加者にはデッサンの基本や描き方などをアドバイスしていただく機会もありました。年明け3月に21ホールで開催されるアルテリッカ新ゆり美術展への出品を目標にする参加者も多く、完成度の高い作品を求めて充実したひとときになりました。



デッサン会の様子

(小田島寛)

アカデミー部主催

俳句講座

今年度の俳句講座は、川崎市アートセンターで上映されていたドキュメンタリー映画「歌人馬場あき子の日々」の鑑賞としました。

7月24日の一日を文化協会関係者のために貸し切りとし、当日は小劇場に80人近い参加者がありました。

俳句と短歌は日本の国民に親しまれている伝統文化であり、代表的な歌人の馬場あき子さんのエネルギッシュな姿に大きな感動と勇氣を受けました。

(関森 田鶴子)

夏休み親子教室

実行委員長

橋本周

◆はじめに

夏休み親子教室は麻生区文化協会の主要事業の一つです。地域の文化・芸術の担い手の方々に講師となつていただき、小学生に伝統文化に親しみ、理解を深めてもらいたいという願いから、2003年より途切れることなく実施してきました。ここ数年は残念ながらコロナ禍でやむなく中止したこともありましたが、今年7月25日から13科目の実施を計画しました。ところが、今夏の猛暑を受けて「鶴見川と生き物」が協力の和光大学の要請で、熱中症防止のため中止に。また、体調の変化による急遽の欠席が多かったこと、科学の教室やITのプログラミング教室の応募が多数あり、時代の変化とともに新しい文化としてこれらと向き合っていくことなど、課題の多い年でした。そうした中で実施したいいくつかの教室の状況をご報告いたします。

◆毛筆で自分の名前を大きく書く こう(担当講師 木村 幾月)

初めて毛筆や硯、墨に出合う子ども



折り紙で切り絵

たちも多いため、その名称や扱い方などを先生から丁寧に教わり、秋水会の方に筆で自分の名前を漢字やひらがなで書いていきます。子どもたちは書き重ねる毎に筆文字に興味を持ち、熱心に取り組んでいました。今年も低学年が多いので、このまま続けてほしいと先生。今まで数年続けて参加している生徒のことや、秋の文化祭に今回の作品を展示することなどを説明され、最後は子どもたちそれぞれが力作を書き残していました。

◆折り紙で切り絵

(担当講師 藤田 正俊)

カッターを使う教室なので、先生より道具の扱いについて細かい注意指導を受け、いざ切り絵に取り組みます。慎重に折り紙サイズの型紙と背景になる折り紙を重ねて切り抜きますが、なかなか上手。人物・草花のシル

エットに色彩柄の折り紙を裏からのり付けして、色画用紙に貼り付けて、額装したくなるような作品に。参加対象は小学4年生から6年生であったので、カッターの扱いも問題なく、それぞれ個性的な色彩を選んで作品にし、楽しく制作していました。「百均で額縁は買おう」を合い言葉に帰る姿が喜々としていました。

◆花よりだんご?

(担当講師 長澤 紫順)

教室名は子どもたちが興味を持つように、「みんなでいけばなを楽しむ」から「花よりだんご?」に変更したそうです。この教室は、麻生区内でいけばな教室を主催している、それぞれ流派の異なる7人の先生方が協力し合って、「麻生いけばな流」の指導をしています。「今年はマスクを外して、子どもたちの顔もよく見えます。どの子もお花を生けている時、花や葉を手を持ってどう生けようかと真剣に考えている表情がよく分かり、とてもうれしく思いました」と先生は話され、「お花の型も大事ですが、子どもたちが自然に触れることを楽しみ、草花を観察しきれいに生ける楽しさや作る面白さを学んでほしい。これからも日本の伝統文化いけばなを守るために努力していきます」と熱く語ってくださいました。



夏休みプログラミング教室

◆夏休みプログラミング教室

(担当講師 井上 俊夫)

子どもたちを指導するのは、井上講師に加え、あさお寺子屋合同プロジェクト・プログラミング教室の5人の指導者。まずパソコンの扱いについて説明があり、次に実技ですが、内容は「パソコンでお絵かき」、「スクラッチというアプリで、猫を動かしたり、水族館の背景に自分でデザインした魚を泳がしたりする」、「マイクロビットというLED表示装置に文字を表示させる」というもの。先生方の熱心な指導により、どのチームも与えられたテーマをうまく実行できたようでした。子どもからは「初めてやったけど、そんなに難しなかった」という声。一方、保護者からは「すごいですね。こんなに簡単にプログラミングができるんですね」という感想が聞かれました。

◆光と色の不思議

(担当講師 佐藤 勝昭)

はじめに「光の三原色」「色の三原色」、「モノに色がつく仕組み」などをスライドで説明。その後、厚紙を使ってランプハウスを作り、赤・緑・青、三原色のLEDを灯して、色の異なる光を混ぜるとどんな色になるかを実験しました。また、いろいろな模様を貼り付けたコマを回してどう見えるかも実験。子どもたちは、工作も実験も大いに楽しんだようでした。



光と色の不思議

使用し、大・小・面相筆を使って画仙紙に「竹とすず虫」を描きます。小学3年生から6年生が対象で、参加者は8人。難しい筆使いや墨の使い方に苦戦しながら、先生の助言や指導のもと、描く楽しさ・面白さ・不思議さを体験して作品を色紙入れにおさめ、全員で写真撮影。そして恒例のスイカ割りを行いました。途中、突然の大雨に降られました。雨宿りしながら志村先生が育てたスイカをたくさんいただき、解散となりました。

◆墨絵を楽しもう

(担当講師 志村 幸男)

この教室は例年、琴平神社内で実施されています。会場に何うとすでに準備は整っていて、床に敷物が敷かれ、二人用の文机に座布団が2枚ずつ置かれ、黒板には学ぶ内容が書かれています。この教室では硯で磨った墨を



墨絵を楽しもう

◆あとかき

今号では全教室のご紹介ができませんでしたが、次の機会にご期待ください。また、ご意見などもお待ちしております。



会員の活躍

40周年記念 第18回発表会を終えて

8月13日、創立40周年記念第18回胡桃(くるみ)バレエスタジオ発表会は、大勢の観客のご来場を得て無事終了いたしました。「コッペリア」全幕に挑戦し、大ホールの舞台には大きなセット(大道具)が並び、総勢40名のダンサーが出演しました。完成度の高い舞台は、一般申し込みの方々からも「公演のレベル」だと数多く嬉しい感想をいただきました。

現在に至るスタジオの歩みは独



コッペリア2023・麦の穂

自の活動に加え、市民館ホールの柿(こけり)落としの舞台出演に始まり、麻生区文化協会主催の麻生区文化祭や、かわさき市民芸術祭などの参加を通し育まれてきたと言っても過言ではありません。この度の会に菅原敬子会長より、祝辞を頂戴し世代交代への期待と、応援のお言葉をいただきました。文化協会の洋舞ぐるーぶの一角としての活動を含めて、スタジオを長く見守ってくださっているお言葉に厚くお礼申し上げます。

1983年、バレエの設備のない白山グリーンタウンの集会所で教室を開いてから、気付けば40年、その間ご縁のあった方々との出会いと、別れを繰り返しながら長い年月を経ました。

自分の生きる表現としてのバレエ、育成をもとに教えることを通じて自らも学ぶバレエ、などを主軸に置きながら歩んで来た今、決して一人ではできない継続が、応援・支援してくださる皆様の力添えによるものと改めて深く感謝申し上げます。

過日、日本バレエ協会より芸術文化の発展に永年寄与したとして舞踊文化功労賞をいただきました。未熟な時期を顧みながら、目に見えない物の価値を伝えることができたか、芸術を愛し一つの事を真摯に追及する大切さを伝えることができたか、卒業した人たちにとってスタジオで学んだ時間

は幸せであつたらうかなど、さまざまな懸念が残りますが、40年を一区切りに引き継いでくれる担い手(息子夫婦)に託します。若い感性、行動力、創造力、柔軟な広い視野など楽しみがいっぱい입니다。これからも新生胡桃(くるみ)バレエスタジオをよろしくお願いいたします。

(伊藤胡桃)

会員の活動報告

新型コロナウイルスが5類感染症

になって初めての芸術の秋、会員の皆様もいろいろ活動を再開しています。「柿生小150年」の原稿を書いてくださった佐藤英行氏が所属する二科

会は、9月6日〜18日まで国立新美術館で二科展を開催し、夏休み親子教室でご協力いただいた志村幸男氏は、9月5日〜10日まで銀座のギャラリー美庵で個展を開催しました。コスモスの美しい絵に魅了されたとの感想を鑑賞された方からいただきました。

(横須賀朝子)

文化協会のこれから

麻生区文化祭

※詳細は総合パンフレット参照

◆邦舞邦楽

10月21日(土)14時開演 ホール

◆俳句大会

10月21日(土)13時開演 大会議室

◆麻生フィルハーモニー管弦楽団

10月22日(日)14時半開演 ホール

◆吟舞吟詠

10月22日(日)13時開演 大会議室

◆洋舞

11月5日(日)16時半開演 ホール

◆美術工芸展 団体展示 秋水会書展

10月27日(金)〜11月1日(水)

ウォールギャラリー

文化サロン秋の講演会

「麻生100年」講師 千坂隆男

11月13日(月)14時開始

第1会議室

《2024年》

あさお古風七草粥の会

1月7日(日)11時

麻生区役所前広場

文化祭・美術工芸展 個人展示

1月19日(金)〜24日(水)

市民ギャラリー

※会場の都合で1月開催

アルテリツカ新ゆり美術展

3月4日(月)〜10日(日)

新百合21ホール

文化講演会

「川崎市誕生物語」講師 小川信夫

3月9日(土)14時 大会議室

《訃報》

謹んでお悔やみ申し上げます

吉澤 伊三夫(2023年6月)

山田 昌(土筆)(2023年9月)

編集後記

5月、麻生区の平均寿命が男女共に全国一位に。「健康寿命」を維持するためには、体力と共に知力の充実が望まれます。7月にはアートセンターで歌人の馬場あき子さんの映画上映会がありました。身近な地域で素晴らしい人生を歩まれている姿には圧倒されました。今号でも年齢を重ねながら地域に貢献し、生き生きと活動続ける会員の文章に勇気づけられます。

この夏はまれにみる酷暑続きで、寄稿いただいた方々には、協力に感謝申し上げます。皆様のお手元に届くころには秋が深まっていることを願いつつ。

(小田島紀美)

【編集委員】

井上俊夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報

からむし 第73号

2023(令和5)年9月30日発行

発行人/麻生区文化協会

編集/麻生区文化協会

からむし編集委員会

川崎市麻生区万福寺1-5-2

麻生文化センター内

☎044-951-1300

印刷/株式会社アブレイブ